スポールブール男子世界選手権報告書

日本代表監督兼選手　豊田　想
選手　熊野　健
選手　兼坂　俊之介
メンタル・コンディションコーチ　渡辺　豊明
テクニカルコーチ　阿部　孝太

今大会出場にあたり多くの方々にご声援いただきました事をこの場を借りて御礼申し上げます。

【大会】第 37 回スポールブール男子世界選手権(モナコ皇太子杯)
【日程】2017 年 9 月 17 日(日) ～ 9 月 24 日(日)
【開催場所】モロッコ王国(カサブランカ)
【参加国】　35 カ国(過去最多)
【日本代表チーム】

- 監督兼選手　豊田　想(８大会連続出場)
- メンタル・コンディションコーチ　渡辺　豊明
- テクニカルコーチ　阿部　孝太
- 総務担当　小林　洋文
- 選手　　熊野　健・兼坂　俊之介(両名共に初出場)

▸　日本代表チーム　（左から豊田・兼坂・渡辺・阿部・熊野・小林）

▸　大会会場(全 12 コート)

１、総括

今大会は初めて選手・コーチが半年間一丸となりチームとしての準備をして挑んだ大会でした。目標としていたベスト 8 は達成できませんでしたが、最低目標としていた予選突破を 6 種目中 3 種目で達成できた事や、過去最多の参加国、各国のレベル向上、対戦した国のレベル、試合内容、獲得点数、過去の日本代表との比較等を考慮すると大きな成果をあげた大会となりました。また半年間に及ぶチームでの準備による成長は日本スポールブールにとって大きな財産となりました。

＜予選突破３種目の詳細＞

- 日本歴代最高点数が２種目(ラピット　25 点、コンビネ　21 点　×　2 回)
- 日本歴代最高順位が１種目(コンビネ　　9 位)
- 日本歴代２位の点数が１種目(プログレッシブ　25 点)

特にコンビネでは日本選手以外は全員世界選手権(ジュニア含)でメダルを獲得した経験のある選手が出場していた死のグループ（フランス、アルゼンチン、トルコ）においてフランスを破ったアルゼンチンとトルコの両国に勝利し予選１位通過した事は FIB や強豪国からみても日本代表の評価を大きく上げる事となりました。準備期間を含めたこの経験を日本代表の成功事例としてスポールブール内はもちろんこの事、世間一般にも発信していく事がスポールブールの認知、普及、強化のために重要だと考えております。

シングルス、ダブルス、プレシジョンにおいてはチーム発足が遅れた事も大きく影響してしまい目標としていた技術（ティール 7 割、ポワンテ７割）が発揮できず戦術を競うレベルに至らず予選敗退となりました。

結果以上に価値がある事としてはチームとして多くの準備をした事によって世界選手権の中で多くの経験を得る事ができた事であります。

しかしながら現時点では世界ベスト 8 との差は歴然であり、オリンピックも見据えると今大会の課題を踏まえ、日本代表チームとして目標をさらに高めチーム体制を継続していく必要性を強く感じました。

２、大会結果詳細

【最終結果】

- シングル　【熊野選手　　・・・　予選敗退　33 位】
  - ・2 敗（対セルビア・スイス）
- ダブルス　【豊田選手・熊野選手　・・・　予選敗退　25 位】
  - ・2 敗（対モンテネグロ・ブラジル）
- コンビネ　【豊田選手　　・・・　予選通過　 9 位】
  - ・予選 1 位通過 2 勝(対アルゼンチン・トルコ)
  - ・8 位決定戦敗退　（対オーストラリア）
- プログレッシブ　【豊田選手　　・・・　予選通過　14 位】
  - ・予選 12 位通過（25 点)、8 位決定戦敗退（21 点）
- ラピット　【兼坂選手・熊野選手　・・・　予選通過　15 位】
  - ・予選 16 位通過（25 点)、8 位決定戦敗退（21 点）
- プレシジョン　　【豊田選手　　・・・　予選敗退　27 位】
  - ・ 予選 1 回目(6 点)、予選 2 回目(9 点)

（１）シングル　【熊野選手　・・・　予選敗退　33 位】

【結果】▸予選１戦目(日本 ●7-13 セルビア)、予選２戦目(日本 ●1-13 スイス)
【目標】▸今後に繋がる経験、抽選次第では予選突破
【戦略・戦術】
- ▸ 各国のカテゴリー分析を行い、レベルと調子により戦術を決定する

【日本での準備】
- ▸ 相手の調子が悪く、日本の調子が良ければ勝てる技術レベルの習得
  (ティール７割、ポワンテ７割)
- ▸ 世界レベルの戦略の考え方の理解・習得・実現
- ▸ 上位国を想定の上ハンディキャップ制度を導入し試合を実施

① セルビア戦　（● 7 -13）

【考察】　※熊野選手より

コートはクセのある 11 番での試合であったが、三郷のように曲がるコートであり、特に気にせずスタートできました。セルビアは７割以上ティールが当たる国で、序盤はポワンテを寄せてもティールで弾かれる事の繰り返しの展開でした。ティールを弾かれた後のポワンテが寄せきれず２メーヌ連続で３失点と苦しいスタートになってしまいました。中盤はセルビアのポワンテが乱れてきたこともあり、こちらがしっかりポワンテを修正し、2-9 から 7-9 まで盛り返す

ことに成功しました。終盤は序盤と同様に寄せてもティールで弾かれる事の繰り返しで最後はこちらが寄せ切れずにじりじりと加点され敗退しました。戦略は、序盤で 0-6 になったこともあり、無理にティールするよりもきちんと寄せて相手のティールミスを待つ、寄ってきたらティールすることに徹しました。

② スイス戦　（●1-13）

【考察】　※熊野選手より

コートは 2 番で 11 番ほどではないが両サイドの曲がりがあるコートでした。スイスもセルビア同様に 7 割以上ティールが当たる国です。スイスは徹底してティールが当たる 15M 以内にビュットを置いてきました。ポワンテも 4 球中 3 球は確実に 50cm 付近に寄せる技術を持っていました。こちらはコートの曲がりは読んでいたが、オーバーが多く相手にプレッシャーを掛けることができず、ティールも短い距離でしたがフォームが安定せず 1 球も当てることができず完敗でした。戦略としてはビュット権を取ってスイスが苦手な 15M 以上の所に置いて勝負したかったですが、ポワンテが寄らずに相手の術中にはまってしまい最後まで抜け出すことができませんでした。

【今後の課題】

- ビュット 1M 前に止めるポワンテ練習の継続
- プログレッシブ 30 点の安定したフォームの構築
- 練習時に相手は 4 球中 3 球寄せる、ティールは 8 割ヒットする事を想定した練習の継続

【予選の結果】

POULE VI	1ère Phase	JPN	KUMANO Takeshi	7	13	SKAKIC Veselin	SRB
		SUI	FRANCHINI Emanuele	5	13	GRATTAPAGLIA Luigi	ITA
		FRA	BELAY Sébastien				
	2ème Phase	FRA	BELAY Sébastien	9	10	GRATTAPAGLIA Luigi	ITA
		JPN	KUMANO Takeshi	1	13	FRANCHINI Emanuele	SUI
		SRB	SKAKIC Veselin				
	3ème Phase	ITA	GRATTAPAGLIA Luigi	9	10	SKAKIC Veselin	SRB
		FRA	BELAY Sébastien	11	7	FRANCHINI Emanuele	SUI
	Barrage	ITA	GRATTAPAGLIA Luigi	9	6	BELAY Sébastien	FRA
	Classement	1er : SKAKIC Veselin (SRB)			2ème : GRATTAPAGLIA Luigi (ITA)		

- 試合の様子

（２）ダブルス　【豊田選手・熊野選手　・・・　予選敗退　25 位】

【結果】▸予選１戦目(●日本 3-13 モンテ)、予選２戦目(●日本 5-13 ブラジル)

【目標】▸日本代表の底上げ(技術・戦術の共有)、抽選次第では予選突破

▸戦術・技術の現時点での日本の立ち位置の確認、今後に繋がる経験

▸各国の戦術引き出し数の確認

【戦略】

- 各国のカテゴリーを行い、相手のレベルと調子を考慮し戦略決定をする
- 他種目への準備(コートに慣れる)も想定

【戦術】

- ビュットはティール率で勝負できる近め(15m 以内)に置く
- ポワンターとティーラーは調子により随時交代検討する
- 先行・強気・我慢・勝負の展開に持っていく

【日本での準備】

- ダブルス日本選手権で課題を抽出
- 試合中のポワンター・ティーラーの交代を定期的に行う
- 現地コートを意識して常に１m 手前を狙う
- 勝敗ではなく戦略を重視してティールやポワンテを行う

① モンテネグロ戦　(●3-13)

- ティーラー豊田選手、ポワンター熊野選手　※途中交代

※ティール率

日本　　合計　6/11 球(55%)　〈豊田　4/8 球(50%)　熊野　2/3 球(67%)〉

モンテ　　合計　15/22 球(68%)

【考察】　※豊田選手・熊野選手より

予選突破常連国の中堅国であるモンテネグロ戦。参加選手もジュニア世代から世界選手権に出場しており技術も経験も格上の相手でした。

戦略としては、15M 以内のティール率ならほぼ変わらないと国内時から共通認識をもっていたので、ビュットの位置を手前で徹底しました。

ティーラー豊田、ポワンター熊野で挑んだがティールをヒットしても寄せられ、ポワンテを近づけてもティールにて弾かれ、1 球のミスで 1 点とられる序盤となりました。相手選手のティール率は約 7 割で、序盤こそティール率は互角で 3-5 とゲームが進んでいきましたが、中盤に熊野選手のポワンテが乱れ、豊田選手が 3 連続ティールを外したタイミングで、豊田選手のポワンテ力を活かす、ティーラー交換によりヒット率を上げる事を目的としてポワンターとティーラーを交換し、相手が崩れるのを待つ我慢の展開が続いたが、最後まで相手が崩れる事はなく 3-13 で試合を終えました。

技術力の圧倒的な差を感じた試合であり、戦術面の勝負に持ち込む以前の段階でした。しかしながら本来であればポワンターのティールが試合を決める事が多いダブルスにおいて、ポワンターとティーラーを交代後も熊野選手が 3 球中 2 球ティールを成功させた事でティーラーが日本に 2 名でてきた事は今後の日本のレベルアップにおいては大きな一歩だと言えます。

▶　試合の様子

② ブラジル戦（●5-13）

▶ ティーラー熊野選手、ポワンター豊田選手

※ティール率

日本　　合計　3/ 9 球(33%)　〈ティールは全て熊野選手が投球〉

ブラジル　合計　6/14 球(43%)

【考察】※豊田選手・熊野選手より

大前提としてポワンテが寄らないと勝負にならないため、前日のポワンテ率とティール率を考慮してティーラーとポワンターを最初から交換し試合に挑みました。試合前日まで悩んだ決断だったが、交換する事により勝率が上がる事に加え、豊田選手が当日 4 種目出場とあって負担を減らすという事も考慮した決断でした。

ブラジルは日本よりも技術力のある国であるが、モンテネグロよりはティール率が下がるので、前回同様に 15M 以内にビュットを置いてしっかり寄せて点を取りに行くティールをする戦略に徹しました。ブラジルはラッファ常連者が出場しましたが、ティール、ポワンテ時のアドバンテージルールを把握しておらず日本にとって有利に試合を進められる状況であったが、ポワンターとティーラーの役割がはっきりしており、ポワンテ率、ティール率ともに日本を超えていた事が敗因でした。ブラジルは 1 メーヌ目こそ 15M にビュットを置いてきたが、以後は 16～17M 付近に徹底してビュットを置いてきました。

ブラジルのポワンターは 3 球中 2 球を確実に寄せる技術を持っており、ティ

ーラーも 17M 付近を 3 球中 2 球当てる技術を持っていました。序盤で 0-6 の苦しい展開になるも、ポワンテの安定とティールを駆使して 4-7 まで盛り返しましたが、最後はやはり 17M 付近のポワンテをブラジルがしっかり決めて加点され、日本としても最大限の力を出し切る事はできたが、ブラジルのポワンテ率が７割を越え、ティーラーも勝負どころできちんと成功させてきた事もあり、序盤の点差を最後まで捉える事ができない試合となりました。

【今後の課題】

- ティーラー、ポワンター共にプログレッシブで 30 点以上のティール力
- ポワンテにおいても最低３球中２球は寄せる技術
- 上記２つの技術を持った選手が２人おり、かつ戦略を阿吽の呼吸で行うため常に日本でも試合を組めるようにする
- 戦術で勝負できる技術習得と戦術の実践練習の継続

【予選結果】

POULE I	1ère Phase	SLO	JANŽIĆ D / KOZJEK J	13	1	BASEI M / TADEUS J	BRA
		JPN	TOYODA S / KUMANO T	3	13	RANKOVIĆ T / MILANOVIĆ D	MNE
	2ème Phase	SLO	JANŽIĆ D / KOZJEK J	13	0	RANKOVIĆ T / MILANOVIĆ D	MNE
		BRA	BASEI M / TADEUS J	13	5	TOYODA S / KUMANO T	JPN
	Barrage	MNE	RANKOVIĆ T / MILANOVIĆ D	13	1	BASEI M / TADEUS J	BRA
	Classement	1er : JANŽIĆ D / KOZJEK J (SLO)			2ème : RANKOVIĆ T / MILANOVIĆ D (MNE)		

- タイムアウト時の様子

（３）コンビネ　【豊田選手・・・　予選通過　９位】

【結果】▶ 予選１戦目　（日本 〇21-17　アルゼンチン）

▶ 予選２戦目　（日本 〇21-18　トルコ）

▶ ベスト８決定戦（日本 ●10-17　オーストラリア）

【目標】ベスト８

【戦略・戦術】

- 予選を１位で通過し２位グループに競り勝つ事でベスト８入りを狙う
- ダブルスよりもベスト８の可能性が高い種目のため優先順位を上げる
- 技術が上の国と当たる時はビュットティールを積極的に実施していく
- ポワンテの立ち位置をテクニカルコーチに委ね選手はプレーに集中
- 自分がティールの時はビュットを端前、ポワンテの時は遠目の中央に置く
- ティール、ポワンテ、ビュット権に間違いがないように指示ボードで確認

【日本での準備】

- 日本では２０点を想定した相手にて試合を行う
- ポワンテのみの練習時間を確保、距離別による感覚を体に染み込ませた
- 日本ではあえて自分の苦手な所にビュットを配置

①　アルゼンチン戦　（〇21-17）

※ポワンテ７点・ティール 14 点（ボール　8 点/12 球、ビュット　6 点/4 球）

【DEMARCO Gaston 選手の経歴】

- 2016 年 U23 世界選手権　ラピット(45 点)　　銅メダリスト
- 2015 年 U23 世界選手権　ダブルス・コンビネ　共に　銅メダリスト
- 2014 年 U18 世界選手権　シングル　　銅メダリスト

【考察】 ※豊田選手より

ダブルスの試合でティールを崩したため不安が残る試合前となったが、試合前の 10 分間の公式練習中に 2 年間苦労してきたティールが当たる感覚のタイミングが完成したのは何かの巡り合わせでした。

ポワンテに関しては同日にダブルスに出場していた事もあり距離感の感覚が染み付いていたため距離に関係なく安定はしていました。ビュット位置も阿部テクニカルコーチと相談し相手が苦手で自分が得意な位置に置く事を 1 回、1 回確認しました。

アルゼンチンの選手はコンビネ種目のみの出場で当日が初戦だった事もありポワンテに苦しんでいたが、ティールは安定していたため 6 点差でも一瞬で追いつかれてしまう恐怖を感じながらの試合をしておりました。

しかしながら勝負所の 7 メーヌ目でビュットティールを 2 連続連成功し計 6 点獲得した事が勝利を決定付けるポイントとなりました。

アルゼンチンはプレシジョンにおいてワールドゲームスで過去 1 回、世界選手権において過去 2 回、またシングルにおいても今大会金メダルを獲得しており 4 名の現役金メダルリストがいる非常に選手層の厚い国に世界選手権の場で勝利できた事は世界に衝撃を与えると共に、自分がやってきた事が間違いではないという証明をする事ができました。

▶ 試合の様子

② トルコ戦 （〇21−18）

※ポワンテ 8 点・ティール 13 点（ボール 9 点/9 球、ビュット 4 点/7 球）

【HAMDI Rustem 選手の経歴】

- プログレッシブのトルコ記録保持者(40 点)
- 2016 年 U23 世界選手権 ラピット(45 点) 5 位
  (銅メダル決定戦にて 2 分半サドンネスでアルゼンチンに 24-25 で敗戦)
- 2014 年 U23 世界選手権 ラピット（44 点） 銅メダリスト
- 2014 年 U23 世界選手権 プログレッシブ(37 点) ベスト 8

【考察】 ※豊田選手より

対戦相手は初戦でフランスを破り（26−18）勢いに乗っていました。自分も同日にダブルスのポワンターでした事により距離感を掴んでおり、かつプログレッシブも行っていたためティール、ポワンテともいい感覚を持ったままの状態で試合に挑めました。

技術力は相手が上、勝利するには戦略等の駆け引きが必要になります。自分のティール時にはビュットを遠距離にして欲しくないと思い、ウォーミングアップ中にわざと相手選手がみている前で奥のティールをしっかり集中して当てました。この一球が綺麗に成功し、相手のイメージに日本は遠くも当たると植え付けることに成功しました。

試合展開としては積極的にビュットティールを狙っていき試合半分の 4 メーヌまでで 12 点獲得し優勢で進んでいきました。しかし前日にアルゼンチンに勝

利した事と同日にプログレッシブにて予選突破したことにより今大会の最低限のやるべき事を成し遂げた満足感から油断と集中力が切れていく自分がいる事を感じました。5 メーヌ目にポワンテが 1 球しか入らず、相手はビュットティールを連続で成功させ一気に逆転されました。

自分自身は技術力の差からここで負けを覚悟しましたが、スタンドからペルー代表のスロベニア人の友達が「バモス S0」と声をかけてくれました。10 年来の友達で、この会場にはまだまだ日本が勝てると思っている人がいる事と成長した姿を見せたいという気持ちになり、スイッチが入りました。どうすれば勝てるかを再考した時に 2 つの事を思い出しました。

- トルコ選手は有利なる最終メーヌのティールを選択しなかった
- トルコ選手はビュットティールを 3 球目ではなく 2 球目に選択しようとした（最終的には監督の指示で 3 球目に変更）

この 2 つの事から技術力はトルコ選手が上だがコンビネの戦略に関しては自分の方が上だという自信を持つ事に成功しました。

6 メーヌでティールを 2 球成功させて続けてのビュットティールも感触はヒットという投球が 2 球続きました。7 メーヌ目ではビュットを奥にして相手ティールのミスを誘う事に成功し自身は得点を重ね同点で最終メーヌとなりました。

ビュット権を持っていたのでビュット位置をポワンテしにくい端に、距離は距離感が慣れている 6 メーヌ目と同じ場所に配置する事に成功しました。1 球目は両者とも成功しましたが、プレッシャーに負けたトルコが 3 球連続でポワンテを外し 3 球中 1 球でもティールを当てれば勝利という状況に持ち込みました。この 1 球を当てるために今までの苦労があったと思えると、自然と当たる流れになり、しっかり 1 球目で成功し勝つ事ができました。また最後のビュットティールも決める事により世界で通じる技術とメンタルが日本にもあるという事を最高の舞台で表現できた事は、自分の人生にとっても貴重な時間となりました。

アルゼンチン戦、トルコ戦に勝利できたのは相手よりも背負うものがあり、勝たなくてはいけない理由があった事、そしてそれに向けて相手よりも準備してきた事が、技術力が劣りながら勝利につながったと思います。強いのは相手と認めながら勝つためには何をすべきかをチームで考えて実行した成果だと思います。

③ オーストラリア（●10-17）

※ポワンテ 3 点　ティール 7 点（ボール 7 点/12 球、ビュット 0 点/4 球）

【考察】　※豊田選手より

日本代表チームの全ての種目で順位が決定し、コンビネ種目のみとなった中での試合でした。今までとは異なり事前に試合がない中で挑んだ試合でした。

オーストラリアは経験豊富なコーチがベンチから随時指示をだしており、日本の弱点も研究されており、日本がティールの時は徹底してビュット奥に配置されました。日本としても直前に行われたオーストラリア選手のラピット・プレシジョンの結果を分析しラピット２と４の位置をティール率 9 割以上の危険ゾーン、12.5m, 17.5m をティール率僅かに下がるのではないかという勝負ゾーンと設定して試合に挑みました。オーストラリアはビュットティールを積極的に狙っていく日本に対し、確実にボールティールで１点をとる戦略をとってきました。

１メーヌ目は２連続ボールヒットで２球連続ビュットティールのチャンスを得るが２連続失敗、2 メーヌ目以降は当日試合がなかった事が影響しポワンテがまったく決まらない展開となってしまい、相手にプレッシャーを与える事ができずにそのまま試合が終わってしまった。結果的にビュットもコントロールできずに相手の危険ゾーンに置いてしまった事も敗因となりました。

オーストラリア選手は最終的にはコンビネで銅メダルを獲得致しましたが、相手との技術力の差を感じた１戦となりました。しかしながら点数をとるよりも最後までリスクをとり勝ちにいく戦術を実行できた事は今後に繋がる 1 戦となりました。

【今後の課題】

フランス、アルゼンチン、トルコと全てが優勝候補というグループに入った事で、ベスト 8 入りには 3 戦連続最大限の力を発揮する必要がでてきてしまった事は不運ではあったが、通常の力でこのレベルの選手に勝てないとベスト８は難しいと感じました。

3 試合合計のボールティール率は目標の 7 割<24/33 球(73%)>を超えたが、ビュットティール率は約 3 割だった事は今後の課題となりました。<5/15 球(33%)>

国内での対戦相手とは違い相手のポワンテ率が高いためティールを当て続けないとビュットティールのチャンスすらない事を意識して準備をしてきた結果、ビュットティールのチャンスを多く導く事ができたのは大きな成果でした。

いずれにせよコンビネでベスト 8 常連になるには下記スキル習得や環境づくりの必要性を感じました。

- ビュットコントロール
- ビュットティール 6 点/4 球(75%)、遠距離ティール 3 点/4 球（75%）の安定
- ポワンテを 3 点/4 球の安定(75%)
- 日本国内で１球のミスが許されない状況や常に追い越される感覚や追いつけない感覚の中で試合をする環境づくり

【予選結果】

POULE VI	1ère Phase	ARG	DEMARCO Gaston	17	21	TOYODA So	JPN
		TUR	HAMDI Rüstem	26	18	GARCIA Romain	FRA
	2ème Phase	JPN	TOYODA So	21	18	HAMDI Rüstem	TUR
		ARG	DEMARCO Gaston	23	22	GARCIA Romain	FRA
	Barrage	TUR	HAMDI Rüstem	24	21	DEMARCO Gaston	ARG
	Classement	1er : TOYODA So (JPN)			2ème : HAMDI Rüstem TUR		

（４）プレシジョン　【豊田選手　・・・　予選敗退　27 位】

【結果】▶　予選 1 回目　6 点(ターゲット 1, 2, 3 をヒット)

▶　予選 2 回目　9 点(ターゲット 6, 11 をヒット)

【目標】▶　ベスト 8

【戦略】▶　ティール率をあげれば点数がついてくる

【日本での準備】　▶　5 月から大会までに 40 回プレシジョンの記録を実施

▶ トラディショナル時のティールをイメージして投球

【考察】　※豊田選手より

日本記録と過去世界選手権の他国ベスト 8 の記録や球数（11 球）を考慮するとベスト 8 の可能性が最も高い種目でしたが、現実を突きつけられた結果となりました。1 回目は 11 球中 9 球ターゲットにヒットしながらも障害球を動かしてしまっており、残り 2 球も数センチ外れるだけでしたので一定の技術力は発揮しましたが、プレシジョン特有のピンポイントで狙う技術の準備をしてこなかったため 1 回での予選突破には至りませんでした。急遽 2 回目に備え日本での準備不足を補うためターゲットに合わせてリリースの仕方と狙い所を決める調整を行いましたが、準備不足は否めず予選敗退となりました。予選敗退の原因の一つに他国が実施している跳ねるボールの利用を日本が実施していなかった点があげられます。ターゲットによっては跳ねるボールを利用した方が得点の可能性があがります。今大会日本がヒットを繰り返しながらも障害球を弾いてしまう状態をみていた他国のプレイヤーが跳ねるボールを利用しない日本を疑問に思った事で発覚しました。長年プレジジョン種目に出場しておりましたが初めての認識でこの時点でも世界との大きな差を感じました。

【今後の課題】▶ 跳ねるボールを利用しての練習

▶ ターゲット別の狙うポイントと角度の確認、技術の習得

【予選の結果】

QUALIFICATIONS												
			P. 1	P. 2	Qu.				P. 1	P. 2	Qu.
1.	BIH	MARIC Drago	11	4		17.	SUI	GAMOUH Yacine	9	16	Q
2.	EST	LINDVEST Arti	12	4		18.	TUR	ÖZTÜRK Faik	10	22	Q
3.	BRA	JOAO Ferla	6	3		19.	MON	LAUGIER Nicolas	9	12	
4.	CHI	BARBANO Franco	11	15	Q	20.	DJI	MOUSSA Ali	0	----	
5.	SLO	JANŽIĆ Davor	26		Q	21.	CRO	BEAKOVIĆ Marko	17		Q
6.	AUS	SAMSA Daniel	19		Q	22.	LBN	EL HARIRI Bascir	14		Q
7.	SUD	OBAI Salah	8	4		23.	MAR	EL GUAMOUSS Med	10	16	Q
8.	CHN	FAN Shan	11	19	Q	24.	ALG	ZOUBEIDI Mustapha	17		Q
9.	MNE	PETKOVIĆ Miroslav	20		Q	25.	TUN	AYADI Mourad	14		Q
10.	USA	GADALETA Giuseppe	12	6		26.	ITA	GROSSO Daniele	25		Q
11.	RUS	DEMIN Oleg	11	5		27.	SRB	BUTORAC Srcan	20		Q
12.	JPN	TOYODA So	6	9		28.	ESP	ALAPONT Josep	10	14	Q
13.	BUL	RADEV Filip	10	11		29.	PER	ALTAMIRANO Jesus	12	20	Q
14.	FRA	CHIRAT Grégory	27		Q	30.	NED	EZHAR Mohamed	4	0	
15.	HUN	KÁSÁ Ádám	6	5		31.	SVK	PAVČO Patrick	12	11	
16.	ARG	PRETTO Nicolás	15		Q						

【補足】

跳ねるボールを利用した方がいいターゲット

①１球使用時

・ターゲット３（５点）、ターゲット８（４点）

②２球使用時

上記に加えて

・ターゲット１（１点）、ターゲット７（３点）、
　ターゲット９、１０（各３_点）

（5）プログレッシブ　【豊田選手　・・・　予選通過　14 位】

【結果】

- 予選 12 位で通過　　25 点/42 球(60%)
- ベスト 8 決定戦 14 位で敗退　21 点/43 球(49%)

【目標】

- 予選突破・可能な限り順位を上げる

【戦略・戦術】

- ミスのパターンをサポートが把握し試合中にアドバイスを実施

【日本での準備】

- スタートに絞った練習（1 分間）
- ターゲット 5,6 に絞った練習
- ビデオ撮影によるフォームチェック
- チームメイトの声がけの確認と実践
- ウォーミングアップ時のターゲット位置の共有化

【考察】　※豊田選手より

試合前に一番予選突破という結果を意識した種目でした。他国が世代交代をしていく中で自分が日本代表としてこの種目に出場する意義としては、25 点以上の予選突破しかないと思っており、実現する事により若い世代に奮起を促すメッセージとなると思っていたからです。2 年に 1 回のたった 5 分のために日々努力をして結果を残せるか。そしてそれを諦めないで何年も継続できるかどう

か。それがプログレッシブ後継者としての条件だからです。自分を倒す後継者がでてこないと日本に未来はない。そんな強いメッセージを伝えたいためには結果を残すしかない。そういった意味で試合前に一番プレッシャーを感じたのがプログレッシブでした。

予選においてはスタート時から 7 球連続ヒットで好スタートだったが、課題としていた 5,6 番目で伸び悩みました。しかしながら渡辺コーチのアドバイスでタイミングを取り戻し、日本歴代 2 位の記録にて予選を 12 位で突破できたのは大きな成果でした。ベスト 8 をかけた一戦では力を出し切れず、予選よりも点数を伸ばす事はできなかったですが、歴代 2 位の 25 点を取る事により目標としていた予選突破を達成する事ができました。

個人的には 2 年前の世界選手権時のプログレッシブ中に審判から試合中に投球エラーを指摘され開始 1 分はボールをヒットされながら無効投球が続いた 2 年間に及ぶフォーム修正の苦労が報われた瞬間でもありました。この達成は一人では解決する事はできす、阿部コーチを筆頭に 2 年間理想の投球フォームを議論しあいプロッグレッシブを実施できる環境を整えてくれたブールスポーツさいたまの方々にも感謝致します。

【今後の課題】

- 5,6 番目のヒット率の安定
- 48 投球できる走力を身に付ける
- 全ての距離に対して一定のリズムで投げる技術の修得
- 体の軸、頭の位置がぶれない、腕が曲げないフォームの修得

【予選結果】

QUALIFICATIONS											
1.	FRA	ABELFO Guillaume	43/49		Q	12.	USA	LUNA Michael	20/43		Q
2.	BIH	ĆUBELA Branko	------			13.	ALG	MAKHLOUFI Abdelkrim	31/44		Q
3.	ITA	ROGGERO Mauro	43/50		Q	14.	TUN	KHIARI Hamza	32/45		Q
4.	ARG	HECKER Lucas	29/47		Q	15.	EST	TIKS Sander	13/39		
5.	AUS	PASCUZZI Santo	23/48		Q	16.	JPN	TOYODA So	25/42		Q
6.	TUR	RECEP Ali Asker	39/50		Q	17.	SVK	PAVČO Patrick	21/44		Q
7.	CHN	LI Panpan	38/47		Q	18.	HUN	VLASITS Marcell	8/46		
8.	NED	BIERSTEKER Paul	8/37			19.	BRA	BASEI Mateus	14/41		Q
9.	RUS	PLOTNIKOV Andrei	13/42			20.	CRO	BRNIĆ Leo	45/47		Q
10.	MAR	ARGUIEL Saad	28/44		Q	21.	CHI	TOSO Giacomo	28/43		Q
11.	SLO	PETRIČ Anze	42/48		Q						

（６）ラピット　【兼坂選手、熊野選手　・・・　予選通過　15 位】

【結果】

- 予選 16 位で通過　　25 点/52 球(48%)
  〈兼坂選手 14 点/28 球(50%),熊野選手 11 点/24 球(46%)〉
- ベスト 8 決定戦で敗退 21 点/53 球(40%)
  〈兼坂選手 13 点/28 球(46%),熊野選手　8 点/25 球(32%)〉

【目標】

- 予選突破、可能な限り順位をあげる

【戦略・戦術】

- ペースを一定に守り確実にヒットを狙い点数を積み上げていく
- 試合開始 1 時間程前からアップを入念に行う
- 試合開始 3 分前の時間では、注意するポイント（正面にしっかり入る、まっすぐ走る等）を最終確認

【日本での準備】

- 目標（25 点）の共有
- フットアウトをなくすための対応
- ラピット集中練習の実施
- スピード別でのヒット率計測

【考察】　※熊野選手より

事前に国内で予選突破の可能性のある点数は 25 点で、当然同点で 2 分 30 秒の決定戦も想定して日本で準備をしてきました。 また、2 人共にフットアウト

で点数を零すこともあり、スタンドの位置や助走の歩幅などやれることはしっかり国内で対策をしていきました。その結果、予選トップバッターではあったが、いつも通りの気持ちで試合に望むことができ、フットアウト等審判の手は挙がることなく予選突破することができました。本戦では 25 点以上を目標に 1 つでも順位を上げたかったが、私のティールが安定せず、 不本意な点数になってしまいました。

【今後の課題】

- チームで 40 点以上取れる力をつける(1 人 20 点以上)
- ティールフォームを安定させるためのランニング等の下半身の強化
- 種目のみのスケジュールになったときの調整方法の取得

【考察】※兼坂選手より

今回予選では 25 点というラピッド歴代日本代表最高得点を出して予選突破することはできたがベスト 8 入りをかけた戦いでは 21 点と下がってしまいました。しかし、実際にベスト 8 入りとなると 25 点であったとしてもそれは不可能であり、平均して 40 点以上出すことが求められるレベルであるため点数が落ちた原因を考える意味はありません。むしろ今後どのようにして 40 点以上出せるようになるかを今回の反省を基に考えることが大切です。しかし、予選で 25 点という現状のレベルでのほぼ最大限のパフォーマンスを行うことができたということは今後に向けての大きなステップになりました。実際そのパフォーマンスを発揮できたことの要因としては試合前のアップにおける調整段階の際に、自身が気づけない悪い癖等を指摘して修正してくれる阿部コーチの存在が非常に大きかったと感じました。このことから今後も客観を主観に変換してくれる第三者の視点は大切です。そしてどのようにして 40 点以上を目指すかとなると、やはり現状の投球数で全て当てたとしても強豪国の点数には届かないため更なる投球数のアップが必要です。そのためには現状のフォームから無駄を省くことが欠かせなくなり、新たなフォームを確立する必要があります。そしてそのフォームにおいて 40 点以上を目指す練習を行っていく必要があります。

【今後の課題】

- 投球数アップ（現状＋10 球）
- スピードに合わせたフォームの確立
- ヒット率約 9 割
- ラピッドはペアで練習を継続して行う

【予選結果】

QUALIFICATIONS									
1.	JPN	KANESAKA S / KUMANO T	25/52	Q	14.	AUS	PASCUZZI S / SAMSA D	38/58	Q
2.	RUS	PLOTNIKOV / OGNEV	10/49		15.	CHI	TOSO G / BARBANO F	45/57	Q
3.	BRA	MATEUS B / JOSEMAR T	15/45		16.	CHN	LI P / LI C	41/55	Q
4.	ITA	MANA M / MANA S	48/60	Q	17.	MON	LAUGIER N / PEYRET F	33/50	Q
5.	FRA	ABELFO G / CHIRAT A	51/59	Q	18.	PER	ALTAMIRANO J / MORON A	41/54	Q
6.	TUR	RECEP A / YAKIN M	47/61	Q	19.	ALG	SAHIH T / BENTRAD Y	24/47	
7.	NED	METSELAAR J / EZHAR M	13/39		20.	CRO	BRNIC L / MILICEVIC M	57/60	Q
8.	SVK	PAVCO / SACHER	30/53	Q	21.	USA	LUNA / TOSI B	----	
9.	MNE	RANKOVIC T / MILANOVIC D	34/51	Q	22.	HUN	KASA A / VLASITS M	12/50	
10.	SUI	GAMOUH Y / LEBREUX P	13/41		23.	BIH	CUBELA B / MIKULIC N	30/52	Q
11.	EST	REMMELKOOR A / LINDVEST A	22/49		24.	SRB	BUTORAC S / SKAKIC V	35/52	Q
12.	ARG	MONTEMERLO G / HECKER L	37/57	Q	25.	SLO	PETRIC A / OPRESNIK V	49/59	Q
13.	MAR	EL MOUSTAFID A / EL GHOFRANI I	23/54						

【ベスト８決定戦】

1/8ème DE FINALE									
1.	JPN	KANESAKA S / KUMANO T	21/53		10.	PER	ALTAMIRANO J / MORON A	26/53	
2.	SVK	PAVCO / SACHER	35/54		11.	CHI	TOSO G / BARBANO F	42/58	Q
3.	BIH	CUBELA B / MIKULIC N	----					22/26	
4.	MON	LAUGIER N / PEYRET F	40/49		12.	TUR	RECEP A / YAKIN M	42/61	
5.	MNE	RANKOVIC T / MILANOVIC D	34/50					21/31	
6.	SRB	BUTORAC S / SKAKIC V	37/52					9/13	
7.	ARG	MONTEMERLO G / HECKER L	44/56	Q	13.	ITA	MANA M / MANA S	47/59	Q
8.	AUS	PASCUZZI S / SAMSA D	43/59	Q	14.	SLO	PETRIC A / OPRESNIK V	52/59	Q
9.	CHN	LI P / LI C	42/57	Q	15.	FRA	ABELFO G / CHIRAT A	48/60	Q
			21/28		16.	CRO	BRNIC L / MILICEVIC M	52/60	Q
			11/12						

▶ コートの様子

3、日本代表チームとしての展望

世界選手権参加国が 16 ヵ国に絞られ、日本としては中国、オーストラリアいずれかに勝たないと世界選手権に参加すらできない状況となりました。各国トラディショナルだけ出場している選手は選手層が厚い強豪国を除くと基本的にいない事を把握する事ができた事は今後の日本代表の方針を決める上で大きな要素となりました。

中国、オーストラリアに対抗するために日本代表選手は全種目に対応できるスキルを持つ必要性があります。

（参考記録　プログレッシブ　オーストラリア 33 点 10 位 中国　39 点　5 位
　　ラピット　　オーストラリア 45 点　5位 中国　45 点　5位）

・オーストラリアはプログレッシブ 33 点の選手がダブルスのポワンターで出場
・中国はラピット 45 点の選手がダブルスのポワンターとして出場

今後世界に挑む日本代表はティール種目としてプログレッシブ 35 点、ラピット 45 点が必要です。またトラディショナル種目の日本代表でもプログレッシブ 30 点が最低必要です。求められる点数は現時点の日本記録よりも高く、選手によっては雲を掴む話となるが、日本代表チームとして出場した 3 選手、3 コーチはこの事を痛感しており、この経験をきちんと日本国内にも浸透させていきます。

日本代表チームは継続活動し、まずは世界選手権で抽出した課題を解決していきます。またオリンピックも踏まえ女子日本代表やジュニア日本代表とも連動し日本スポールブール界の底上げを行う使命感を果たしていきます。

４、日本代表チームの実施内容

（１）日本代表チーム結成の背景

2015 年の世界選手権にて豊田選手が投球ファウルを連発しました。この経験から 2 年間かけて個人での準備に加えチームでの準備体制を整える必要性を感じました。また過去の世界選手権でメダリストを破る等の実績がある豊田選手が蓄積してきたノウハウをチーム内に伝授する事でチーム全体の力を底上げ、そのチーム力を日本の強みとして世界に挑む事を目的として日本代表チームが結成されました。

（２）日本代表チームスケジュール

（毎月最低 1 回会議を開催、練習内容ややるべき事を毎日共有、協議）

・2016 年 12 月　日本代表チーム基準値・期間・方針決定
・2017 年 1 月　チーム運営を仮でスタート、技術講習会
・2017 年 2 月　メンタル講習会
・2017 年 3 月　コンディション講習会
・2017 年 4 月　日本代表選手内々定
・2017 年 5 月　日本代表監督決定、日本代表選手内定、日本代表チーム結成、
　　コンディション講習会
・2017 年 6 月　日本代表チーム内定（監督、選手、コーチ等）
　　日本代表チーム中間報告会開催
・2017 年 7 月　日本代表チーム合宿開催
・2017 年 8 月　日本代表チーム合宿開催
・2017 年 9 月　世界選手権決起会、世界選手権（カサブランカ）
　　10 月　世界選手権報告会

（３）日本代表チームの存在意義

- 伝える（世間一般、プール内、身内等）
- 支える（組織づくり、大会運営、クラブ運営等）
- 教える（初心者講習会等）

※上記の実行には「世界レベルのスポールプール技術」が必要となる

（４）世界選手権での目的意識の共有

世界選手権はスポールブールを世間に伝える２年に１度の大きな機会である。チーム力でベスト８を実現する事により日本スポールブール界発展を目指した。

（５）各役割

① 監督 ・・・ 豊田

【日本での準備】

- 目標達成（チーム力でベスト8）を達成するためには何がベストの決断かを決定する。（チーム運営・人選・コーチ育成・選手育成・種目決定等）
- 世界レベルの戦略の伝授
- モロッコの文化等、海外についての情報収集、発信
- 前回同じ会場で試合をした女子日本代表からの情報収集、発信
- 世界選手権の予選突破の仕組み、スケジュールの確認、共有
- 種目別の国別ランキング、他国の特徴、個別選手情報収集、共有
- 語学研修実施、目的に応じた国内大会の運営
- ユニフォーム手配、チケット手配、スコア記入の方法、ルールの共有
- 広報活動（新聞社２社、市長訪問等）、メンタル講習会の実施
- 合同合宿（2 泊 3 日）のスケジュール管理、宿提供

【世界選手権中】

- 大会中ここで何をすべきかを共有
- 大会スケジュールを網羅し、戦略、技術、メンタル部門に指示
- 練習場所、練習道具、練習時間の確保

【世界選手権後】

- 今回の課題、次回の目標をたて日本代表チームの方針をまとめ実行

② 選手 ・・・ 豊田、熊野、兼坂

【日本での準備】

- サポートを受けている事に感謝し、家族（恋人・親友含）・仕事・スポールブールを生活の最優先事項とした。
- 可能な限り毎日ボールを投げる・ストレッチ・走り込みを行う。体重管理を行う。また上記事項について毎日チームメンバーと共有した。

【世界選手権中】

- 個人ではなく日本代表チームという事を常に意識

- 最後までチーム力でベスト８達成のために今何をすべきかを意識し実行

【世界選手権後】

- 世界選手権での経験を踏まえ日本代表選手とはどんな存在であるべきかを示す

③　メンタル・コンディション　・・・　渡辺

【日本での準備】

- 練習開始時における静的・動的ストレッチ方法を動画で配信
- 選手の身体機能テストの実施
- テーピング勉強会の実施
- 栄養管理の開始（練習後のタンパク質摂取など）
- 筋力トレーニング指導
- メンタル面において投球前のルーティンの必要性の指導
- 合宿時におけるケガ予防のための投球管理・アイシング
- 合宿（合同練習）におけるコミュニケーションを促通（２泊３日）
  ストレッチ&マッサージの実施
- スポンサーの獲得
- ドーピングチェック（投薬やサプリメントの使用と安全性について確認
  合同練習においてコミュニケーションの促通
- 救急セットの購入と応急処置の確認
  各自アミノバイタルを購入し栄養面へのサポート（ケガの予防, 疲労の回復）
- 選手が練習に集中できるように選手の技術以外の悩み相談
- 選手の怪我の状態チェック、予防アドバイス

【世界選手権中】

- 空港で全身のストレッチを指導（筋肉短縮，硬直の改善，全身の血流改善による疲労回復）
- 怪我等の応急処置、選手モチベーション管理
- 選手の話相手をつとめストレスを解消させた。
- マッサージ、軽食確保
- 試合前，肩周りのストレッチ
- 試合終了後，就寝前の全身ストレッチ・マッサージ（20～30 分）
- 試合開始前，試合後のアミノバイタル補給の助言
- 写真・動画撮影、Facebook の定期更新

④　テクニカルコーチ　・・・　阿部

【日本での準備】

- ティール、ポワンテの 7 割安定実現のためにフォーム分析、チェック、指導（ビデオを活用し各選手のフォームを分析）
- ティール、ポワンテのモデルフォームの確立
- ティール、ポワンテエラーフォームの原因把握・修正手法提案
- ティール、ポワンテの種目別対策、練習方法の提案、実施
- ダブルヒットを実現するための分析

【世界選手権中】

- ウォーミングアップ時の数球で悪いところを指摘し修正点を提示した
- 試合中にフォームのアドバイス
- 対戦前の相手分析・対戦相手の戦術決定
- 試合中の戦術指示、ポワンテ時の立ち位置、ライン指示
- タイムアウト時における指示
- 予選突破やサドンネス等の可能性を常に把握

⑤　戦略担当　・・・　熊野

【日本での準備】

- 世界レベルの戦略の理解・実践・実現
- 自分の調子を考慮した戦術、相手の技術、調子を考慮した戦術、点差や残り時間を考慮した戦術、流れを変える戦略、大会全体を考えた戦略、タイムアウト時の指示確認

【世界選手権中】　阿部テクニカルコーチが代理

⑥　総務　・・・　小林

【世界選手権中】

- 通訳、会議出席
- 対戦相手国選手の過去実績データ提供、女子世界大会時の情報提供
- 他国分析、情報収集
- 写真撮影、ビデオ撮影
- その他全般サポート